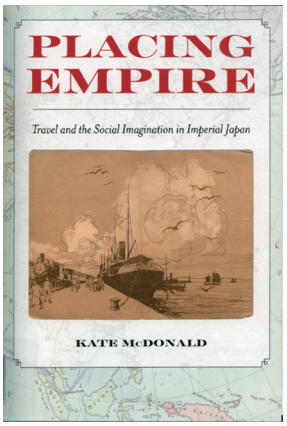
書評

ケイト・マクドナルド『帝国を位置づける——大日本帝国における旅と社会的想像』

Kate McDonald, *Placing Empire: Travel and the Social Imagination in Imperial Japan*

デ・アントーニ　アンドレア



University of California Press, 2017

空間というものがどのように形成されるのかという問いは、（人文）地理学、文化人類学、社会学等の中で古くから議論されてきた。同様の問いを持つ本著は、十九世紀末期から一九五〇年代初期までの、日本からの朝鮮・満州・台湾への観光の研究を通じて、大日本帝国主義の空間に対する政治（spatial politics）を分析するものである。本著には大きく二つの軸があり、一つ目は大日本帝国の政治である。大日本帝国がいかに、彼らが「外地」と呼ぶ植民地の住民を服従させ、領有した土地を支配してきたかを検討する。そして国民としてのアイデンティティが外地まで広げられる過程で、場所という概念が位置づけられることを通して帝国主義が正当化されたことを分析する。

二つ目の軸は観光である。本著は帝国政府が「国土」を直接的に体験させるための制度として全帝国レベルで機能させた観光に焦点を当て、大日本帝国における空間に対する政治を検討する。著者は観光を分析することを通じて、空間的イメージ（spatial imaginary）と空間・場所における想像が、支配の政治と、日本と植民地との差異の構築にどのような影響を与えたかを考察する。

著者はこれらのことを歴史学、地理学の枠組みだけではなく、ポストコロニアル論にも基づきながら論じている。さらに、大日本帝国の中で観光が構築される過程を考察するために、近年社会科学や人文学の中で注目される、情動（affect）と感情の概念も取り込んでいる。以下では本著の構成と内容を紹介する。

本著は四つのパートから成る。理論的アプローチを説明する序論、帝国が「文明化」を軸に行なった、空間に対する政治に注目

する「第一部」（第一章と第二章）、第一次世界大戦後に大日本帝国が危機を迎えた結果、いかに「多文化の地理」へと変化したかを考察する「第二部」（第三〜第五章）、そして最後の一章である「結論」である。

序論では理論的な議論と本著の目標が提示される。著者の議論の出発点の一つは、明治政府が北海道を併合した一八六八年から、正式に台湾などの植民地を放棄した一九五二年までの間、「日本政府は法律・政治的に国土と植民地化した領土を区別するような単独のメカニズムを持っていなかった」（p. 1）ということである。

「文明化の地理（the geography of civilization）」と題される第一部は、日本が帝国化し領土を獲得しはじめた日清戦争の時代から一九一〇年代までの時期に着目する。著者によると、この時期においては「国土」という概念の定義はあいまいだった。しかし、日本からの旅行者が朝鮮や満州の観光地で情動的関係を構築することを政府が支援することで「国土」は実質化されてきた。また、この時代においては「文明化された日本」と「文明化されていない領土」が対立的に描かれていたことを、旅行者が残した資料に基づきながら示している。

第一章では、帝国の旅行者が新しい領土を「国土」として経験し、情動的な関係を築くことにより、植民地が「国民」を再定義するような場所として機能してきたことが明らかにされている。著者は、内地の学生が新しく従属した領土への視察旅行に行っていたことや植民地の社会的、政治的エリートが内地の都市に旅行していたことに着目する。そして、このような直接的経験に基づく情報を広げていく主体が、政府により戦略的に構築されてきたと論じ、その過程を新聞記事や学生の報告書、日記等の史料に基づき明らかにした。さらにそれによって政府が日本の国民や国土に対する一体感を醸成し、領土拡大を肯定するような国民的感情を作ったと論じる。しかし、その結果、地理的な位置がアイデンティティの形成と関わるようになり、内地人と外地人というヘゲモニー的な社会的想像を再生産したと主張する。

第二章は、内地人用の台湾、朝鮮、満州へのガイドブックに着目する。そこでは、内地で出版されたものだけではなく、台湾総督府や朝鮮総督府、南満州鉄道株式会社から出版されたものも扱われている。著者は、旅行者の経験することをコントロールすることによって、大日本帝国政府がいかに植民地に対する支配を正当化したかを分析する。ガイドブックは、政治・経済・国家主義という三つの「モード」に基づき、植民地の過去、現在、未来を、「文明化された」大日本帝国と関係によって描きなおした。その結果、植民地の住民は自らの土地との関係が切断されたと論じる。例えば、ガイドブックでは、植民地の港・ダム等のインフラは大日本帝国だけに開発されたものとして表象され、建設に動員され

た現地の住民については言及していない。このように描くことによって植民地の住民は「場所から浮遊した存在」（out of place）となり、隅々まで文明化されたとされる想像的な「大日本帝国」の中に再位置づけされたと主張する。

「多文化の地理（the geography of cultural pluralism）」というタイトルを付けられている第二部は、一九一〇～三〇年代に着目する。第一次世界大戦後に朝鮮、中国、台湾で起こった反乱の結果、それまで地理的領域や文明／非文明という軸に基づいて構築されてきた内地と外地、あるいは内地人と外地人という区分から、文化的領域と民族というより包括的な言説に基づくかたちに再構築されたが、その過程について分析している。

第三章で著者は、帝国の空間に関する政治が、移動の自由という理念的な側面でも観光という実践的な側面でも「移動」を重視していたと主張する。第一次世界大戦後にそれまでエリートに限られていた観光は大衆化した。しかし、この時期は外地人と内地人の同化や様々な民族の平等という理想的な価値観が喧伝されると同時に、外地における労働者や左翼活動家の移動が制限されるなど帝国内に新たな境界が作られた結果、移動の可否によって国民の間にも新たな境界が構築された時期であった。観光に関わる組織が「国民」の移動の自由を喧伝していたにもかかわらず、植民地から移動しようとしていた外地人の資料からは、移動が実際には制度的に制限されていたことが示される。

第四章は、固定的な民族・文化と紐づけられ概念化された「領土」を基盤として作られた、観光をめぐる言説に注目する。特にその中心となるのは「地方色」（local color）である。主に外地における反帝国主義的思想の広まりと内地の都市における消費文化の普及によって、観光に関する広告は外地のエキゾチックな特色や内地の都市との差異を強調するようになった。すなわち、政府など植民地主義を推進する組織は、文化と言語の差異に基づき民族自決するべきだという朝鮮、台湾、中国の独立運動の主張を流用し、差異を強調したエキゾティシズムを観光の魅力として内地の都市民に売りこんだのである。したがって著者は、大日本帝国は統一的な地理的存在であるより「共生可能な多様な文化を持つ地域であり、多数の民族体によって成り立つ国体」（p. 105）として想像されていたと論じる。また、歴史や労働文化、風景等に基づいて「地方色」を定義づけるメカニズムが、さらなる台湾の先住民の土地の奪取等を含む、新たな排他的実践を正当化したと主張する。

第五章では国土と旅行者の情動的関係に注目する。著者は旅行者の語りを分析しながら、彼らが国土を多文化的な空間として捉える一方、内地人と外地人の間の上下関係を経験したことを明らかにする。また、日本語の言語能力が「帝国の旅行者を言語の

能力と適切さの審査員（examiners）とし、植民地化された者を審査される側として位置づけるような帝国文化の新しい階層制度」（p. 159）を構築するために利用されたと論じる。したがって、植民地の住民は基本的に未熟な国民として位置づけられ、彼らが完璧な日本語能力を習得した場合は、従属する外地人たちから開拓する側の内地人と近い者と見なされるようになったのだと主張する。

結論では、大日本帝国が植民地を喪失した第二次世界大戦後の、帝国の観光を担っていた機関による国土の再構築と再位置づけ（re-place）に注目する。例えば、戦後に行なわれた外国人を招くための観光キャンペーンは帝国主義の過去を脱構築するものだった。また戦後から現在までの観光において、北海道や沖縄は帝国における外地のように、多文化主義を担うものとして位置づけられ表象され続けた。

本著はガイドブックや新聞記事、日記、紀行等の多様な一次資料に基づき、大日本帝国の構築過程に新たな光を当てた。また、政治・空間・権力の相互関係の通時的な変容のあり方を示したのも本著の大きな貢献であるといえる。一方で、筆者にとって不足に感じた点が二点あった。一点目は、情動をめぐる議論である。本著は旅行者の情動的反応や観光地における情動的空間をとりあげるなど、「情動」を重要なタームとして論じている。しかし、哲学や文化人類学など様々な分野で議論されている情動に関する議論の流れが示されていないため、本著の情動に対する理論的貢献が見えにくくなっている。旅行者の情動・感情的な反応と空間との関連性を示したことは、本著の大きな貢献であると思われるが、それが情動の理論でどのような意味を持つかが示されればよかったと感じた。二点目は形式についてである。著者の語りは非常に強い一貫性を持ち、様々な理論的枠組みと資料に基づく情報を組み合わせながら議論している。しかし、著者が基づいている資料や出典が本文で十分に議論や説明されない場合も多く、本文を追うだけでは論点が著者の主張であるのか、資料に基づいたものなのかが不明な部分が散見された。本著の豊富な脚注を丹念に読み解けば、それを追うことは可能であるかもしれないが、資料や出典が重要な意味を持つ著作であるので、その提示の仕方を工夫した方が、よりよい読書体験を提供できたのではないだろうか。